

令和2年度 長期ビジョン審議会第2回総会 議事録概要

1 日 時：令和3年2月22日（月）15:45～17:50

2 場 所：オンライン開催

3 参加者

委員：五百旗頭会長、赤澤委員、庵途委員、笹嶋委員、塩谷委員、志智委員（幸田代理）、杉本委員、摺河委員、高品委員、谷口委員、タマシ委員、突々委員、那須委員、伴委員、平田委員、古山委員、三上委員、諸富委員、葭岡委員、吉富委員、吉本委員、井上委員、佐久間委員、松元委員、大川委員、山本和樹委員、藤本委員、門田委員、木築委員、岸委員、山本益嗣委員（計31名）
県側：金澤副知事、水埜政策創生部長、池田計画監、守本局長、木南課長

4 議事

(1) 開会

○金澤副知事

このコロナ禍は私たちの生活に非常に大きな変革を強いている。働き方はリモート勤務、人との関係もオンラインのツールを使っての付き合いに変わり、それに必要な技術が着々と進歩している。コロナ禍が社会変化を加速する効果は相当大きかったのではないかと。

審議会の皆様には30年先を見越した長期ビジョンの議論を頂くが、その方向性は今まさに起きているコロナ禍の先にあるポストコロナ社会と重なってくるのではないかと思う。その意味では、逆に、長期ビジョンの議論がしやすくなった、いろいろな材料をこのコロナ禍が与えてくれたということになるのではないかと思う。

今日お配りした将来構想試案では、6つの方向性のもと39の未来シナリオを提示した。試案の狙いは、従来の延長線上ではなく、大胆に未来を提示するところにある。その意味で、あくまでもたたき台、議論の素材であり、委員の皆様から意見を頂くことで中身はますます磨き上げられていくのではないかと期待している。活発な議論をお願いする。

(2) 新全県ビジョンの方向性

○五百旗頭会長

昨年7月に知事から当審議会に対して新しい将来ビジョンの策定について諮問があったことはご承知のとおりである。それを受けて将来構想研究会が新全県ビジョンの方向性について報告書を取りまとめた。今日の1つ目の議題は、この将来構想試案について委員の皆様から意見を頂くことである。

○木南ビジョン課長

（資料1説明）

○赤澤委員

この試案を地域ビジョンの議論につなげる観点から2つ意見を申し上げる。

1つ目は、p.8の大潮流の人口減少・超高齢化の中の人口の偏在化。ここは、人口の偏在化と流動化としてはどうか。ただ人口が減る、都市に集中するというだけでなく、その中でいろいろな世代、いろいろな働き方によって流動化することは止められないと思う。人口が減るので増やすとか、キープするのを諦めるといった議論になりがちだが、社会として確実に流動化は進むので、流動化を前提にして、新しく入ってきた人に地域の良さを理解してもらってコミュニティに参加してもらい、新しい兵庫、新しい地域のエンジンになっていただくといった視点を入れると、各地域のビジョンが考えやすくなると思う。

2つ目の意見は、p.32の未来シナリオの関係イメージに関して。アマゾンのジェフ・ベゾスが言っているように、10年後何が変わっているかよりも、10年後も変わらないことをまず考えて、それを基に変わるテクノロジーや新しい価値観、やり方で戦略を立てることが大事だ。シナリオの関係をいろいろ組み合わせで示しているが、例えばこの中で17、22、28などは、根幹にある変わらないシナリオであり、その上で初めて発揮される新しいやり方、新しいテクノロジーのシナリオもある。こうしたシナリオ間の構造が分かるように関係イメージを整理できないか。

○庵逄委員

人口減少が続く中で国の政策で進められている地域創生、人口ビジョンの中で、私どもの町の計画でも、人口減少に対して、ある程度人為的に人口を増加させる手立てばかりを考えている状況だ。現実には確実に人口は減少していくということをしっかりと捉え、人口減少を緩和する政策は必要だとしても、人口は減少してもみんなが幸せに元気に暮らせる地域を維持していく、このことに主眼を置いたビジョンには是非していただきたい。

また、情報化、インターネットを中心とした技術革新によって生活や地域のあり方が大きく変わってきている。技術革新を前向きに捉えながら、どうしても変わってはいけないもの、守るべきものは守るという観点も大事にしてほしい。

○笹嶋委員

試案p.28～29の柱立ての3、4、6辺りがコンピュータ、ICT、AIなどに関わってくると思う。コロナ禍によって、コンピュータやネットワークが必要不可欠なインフラだという認識が広がったので、この機を捉えて兵庫県だけでも構わないので、インフラ化してしまっただろうか。インフラ化してしまえば、いろいろなシナリオがそのインフラの上で実行できる。逆に言うと、そこをきちんと整備しないでそれぞれのシナリオをやろうとしても、うまくいかないと思う。例えば子どもが小学校に上がる時は全員がパソコンを持つようにする。あるいは全ての家庭に対してブロードバンドネットワークを整備する。そうしたインフラを整備してしまうということを入れ込むべきかと思う。

○塩谷委員

p. 29の柱立て6の主な意見の一番下に木質バイオマス発電に本気で取り組むべきと記載されているが、林業界ではCO2が長く固定される建築用材や木製品の利用を主に考えている。木材の利用はカーボンニュートラルな持続可能社会の大事なツールだ。発電用材は林業の従たる産物で、収益面からも発電用材を主にする林業は成り立ちにくい。ここは発電用も包括する木材利用という言葉が適切かと思う。

p. 64の左上に「森林の公有化」の記述がある。放置林、所有者不明土地を自治体に任せべきという趣旨である。これも一つの方向ではあるが、言葉としては「公有化」より「公的管理」を使う方が適切かと思われる。

今、森林林業施策は林業の成長産業化と森林資源の適切な管理の2本柱で進められている。国全体の大まかな数字では、成長産業化を進める区域が3分の2、残りの3分の1が林業経営に適さない森林で、市町による公的管理を進めていく区域とされている。林業の成長産業化はICTによる森林管理、生産管理、ドローンの活用等による3K林業からの脱却、CO2吸収サイクルの早い森づくりなどを進めていこうとしており、県内で既にドローンによる苗木の運搬が試行されており、人手不足を補う戦力として期待を集めている。これらに都市における第二の森づくりとも言える建築物への木材利用の拡大を加えて、2050年カーボンニュートラルを見据えた対策が組み立てられている。森林林業の明るい未来に向けて林業の成長産業化と木材利用の推進にかかる記述を未来シナリオに加えてほしい。

○志智委員（幸田代理）

1つ目は、ビジョンの中に近隣府県のビジョンとの関連について記述がない点。商工活動に関しては、ほとんど県境関係なく展開しているので、県境のすぐ外側の他地域の長期ビジョンの方向性も加味して考えていく必要がある。

2つ目は、p. 25の大潮流6に関して。個人事業主の存在感が高まりつつあると書かれている。商工会では、若い方、シニアの方も起業して商工会を頼ってくる方が増えてきているが、全体の潮流としては廃業が多くて会員数は減っている状況だ。関連して注目したのがp. 28やp. 56の「半農半X」というこの言葉だ。商工会でも農林水産業の事業者の会員が増えている。率では少ないが、特に但馬、丹波、淡路、西播磨では、そういう会員が増えている。農林水産業での新たな起業の動きをもう少し深掘りしてはどうだろうか。

3つ目は、柱立て6「次代への責任」に関して。地域を守り、未来へつなぐと書かれているが、商工会では、地域の持続的発展ということで事業承継に今非常に力を入れている。地域で事業を行っている方々がその地域の宝を守る中心になっている。ところが試案の中に事業承継の記述がない。シナリオのどこかで地域の持続的発展と事業の承継にも焦点を当てていただきたい。

○古山委員

p. 23の大潮流1で、日本より少ない人口でも生活満足度が高く、日本以上の生産性を発

揮している国があると述べているが、シンガポールはその一つだ。彼らの成功の裏には、徹底的な選択と集中があって、彼らは高付加価値の分野で勝負することにレーザーフォーカスしている。政府によるビジネス環境整備や企業の収益性向上支援なども際立つレベルだ。何をビジョンにするかは兵庫固有であるべきだが、ビジョンを達成するには大胆な戦略と施策、リーダーシップとスピード全てが必要であることを肝に銘じる必要がある。

p. 26以下の新ビジョンの方向性で、個性の追求が柱立てのトップに掲げられたことはうれしく思う。ただし、地域と産業については強みや個性を生かすことに主眼を置いているのに対し、個人については一人ひとりの個性の尊重とか、自分が大切にしている価値の追求といった記述にとどまっており、それらを通して結果として個人が生み出す価値を最大化するといった、追加で期待できる利点への配慮が欠けているのはもったいないと感じる。

p. 29の柱立て6「次代への責任」の教育の刷新の方向性で、個性を伸ばす教育しか挙げていないのが気になる。自発的に問題を見だし、考え、議論する力を伸ばす教育も同じように重要だと思う。この点はVUCAな世界に対応するためにも、グローバルな人材を育成するためにも肝要である。実際、海外で教育を受けた学生は幼い頃から徹底的に自分で問題点を見つけて、自分の考えをまとめて議論をするという訓練を繰り返しているのので、その結果、いわゆるグローバル人材は自発的に考えて行動することができて、典型的な日本の教育しか受けていない人たちは指示待ちが多いと言われがちだというのが現状だと思う。未来シナリオ33の「開かれた学校」に主体的な学びを促すシステムと書かれているが、今言った話がこの中に含まれているということではなく、考える力、自発性、そして議論を臆さない人材づくりということの一つの目標としてビジョンで意識的、明示的に掲げないと変化は期待できないのではないかと思う。

○杉本委員

1点目は、p. 35の未来シナリオ2「活力を支える健康」の中段辺りに先端医療が進展と書いてあるが、現在分かっていることを書いてあるだけで、2050年のビジョンとしては物足りない。例えば、将来的にはゲノム配列だけでなくゲノム構造を考慮した病気の予防が可能と加筆してはどうか。2012年にゲノム編集のテクノロジーが出て、ご存知のように2020年のノーベル化学賞をその開発者が取ったし、ゲノム編集のトマトなど農業分野で実用化がもう出始めている。10年かかるか、かからないかで実用化の方向に動くので、今言ったようなゲノム構造という用語を使って加筆したらよいと思う。

もう1点は、p. 43の未来シナリオ9「世界に貢献する兵庫人」で、逆に兵庫人として海外から来られている方を取り扱うのも一つかと思う。左下に書いている「広がるグローバル人材」にプラスアルファ、海外から来ている、将来母国の科学技術を支える博士研究員などの高度な人材を兵庫で育成するということを書いてはどうか。例えば、インドから既に多くの博士研究員が来ている。将来インドは非常に伸びてくる。そこの人材が兵庫で経験した研究で伸びるということも想定して書いておくのがよいと思う。

○摺河委員

30年先、我が国の人口は1億人を切ると言われている。社会構造が大きく変わる。海外から来る人材に日本の社会に貢献してもらえよう教育を展開していく計画を立てていかなければいけない。

一つは、そういった方たちを受け入れるために、英語の4技能、特に話す、聞く、の教育を初等教育から導入していくべきではないか。小学校の必修科目に英語が加わったが、日本の社会環境において英語を使うことはなかなか難しい。韓国で展開している英語村のようなものを導入してはどうか。特に兵庫県は広い県土なので、地域ごとにそういったものを設けて、1日研修、宿泊研修のような形で英語漬けにするということも一案である。

また、初等教育で思考力、判断力、表現力を育成するために、平田オリザ先生がされている演劇教育などを導入してはどうか。

海外人材の育成では、中等教育の段階から日本に来てもらえるようにすることも必要だ。そうすることによって、しっかりと日本の文化を身につけ、将来、日本社会に貢献してもらえよう海外人材の育成ができる。そのためのオフショアスクールの展開なども考えていくべきだ。

○五百旗頭会長

英語村というのはどういうものか。

○摺河委員

韓国の例で言うと、英語村の中で日常生活が完結し、そこでは英語のみで生活することが奨励されるというような形のものと聞いている。

○高品委員

p. 40～41の未来シナリオ「進化する御食国」の内容はそのとおりだと思うが、特に将来を考えると、p. 40の「農業が持続的に発展」が気になる。私自身、農業の持続性に十分自信が持てない。図表で使っている東京大学の鈴木先生の主張は、まさしくそのとおりであり、兵庫県だけで農業の経営基盤を支える施策ができるかどうかという以前に、国として農業の持続性を支える施策をいかに具体的にするかが重要だと思う。

2つ目は、p. 41の「スマート農業」に注目したい。今、国でも力を入れていることは承知しているが、これから農業従事者が減少していく中で、高度で高額なロボット技術といったものだけでなく、もっと身近で、安価に科学技術を導入できるようなレベルのスマート農業を求めたい。

3つ目は、昔は県土の至るところの農村に人が住んでいたが、今、限界集落と言われているように、特に農村部で人口減少が進み、空き家が非常に増えるといったことになっている。人口減少がこれから一層進む中で、こうした農村の将来をどう描くのか。イメージをどこかで示す必要がある。昭和初期のような昔に戻って、山の奥にも人が住んでいると

いう状況は考えにくく、どこか中核的なところに集まり住んで、そこを中心に農業をし、生活をしていくようなイメージの農村が考えられるのではないか。その辺りのことも検討してほしい。

○五百旗頭会長

農村部の限界集落化の問題に至るところで苦闘しているわけだが、農村という定義ではなくて多重化したいろいろな機能を持ち、地域の中心的な役割を果たす拠点のようなもののあり方を追求すべきという指摘である。日本全体にとっても、兵庫県にとっても大きな課題であろう。

○谷口委員

地方自治体では、急激な少子高齢化の進展や東京一極集中の是正など、この先30年間の地方を左右する重要な課題を抱えている。このような課題の解決に向けて、デジタルトランスフォーメーションの推進やソサエティ5.0の実現など新たな技術を活用することにより、地方の魅力を創出し、地方への人や仕事の移転を促進することで分散型国土の具現化を図ることが重要である。また、地方への回帰を促進するに当たっては、人や地域のつながりの重要性を改めて認識し、その地域に住み続けたいと思えるような活力ある地域社会の実現を図ることが大切である。

本日示された将来構想試案では、そうした方向性が示されており、これに基づいて多様性に富んだ兵庫県の各地域の特性を生かしたビジョンづくりを進めていただきたい。

○五百旗頭会長

一極集中から地方分散に行かないといけないとずっと言われながらできていない。コロナ禍の副産物で、ある種の分散を進める動きがあるが、兵庫県ではどのような状況か。

○谷口委員

少なくとも関心のレベルでは地方に目が向いていると感じるし、具体的なアクションとしての移住も増えているが、大きな潮流になるかどうかは、まだ分からない。

○五百旗頭会長

東京周辺での分散化はかなり広がっていると聞くが、それに比べると、地方では、まだパラパラという感じか。このパラパラを力強い流れにするような策を検討してもらいたい。

○タマシ委員

1つ目は、p. 43の「広がるグローバル人材の育成」とp. 68の「学校・教師と地域・専門スタッフとの連携」に関して。兵庫県立大学では留学生向けにProgram to Experience Japanという日本を体験する科目を開講している。これは地域や、地域の学校と連携して

行っていて、留学生の日本や兵庫県に対する理解を深めるよい機会になっている。私自身の研究テーマである「祭り」に絡めて言うと、日本の祭りや、伝統的なお盆は、再生というよりは、保存し、次の世代に伝えることが非常に重要だ。グローバル化に対応する一方で、日本の独特な部分を保つことも重要であり、そうした視点からいろいろな教育プログラムを地域、学校、大学が連携して考え、実施していくことが大事だと思う。

2つ目は、p. 42ページの「多文化入り混じる兵庫」について。兵庫県は異文化、外国人を受け入れてきた県として有名である。特に神戸市は、外国人が入りやすいところ、住みやすいところとして作られてきた。しかし、このコロナ禍で一時日本に住んでいる外国人が入国できないという問題などがあり、日本に対する見方や意見が少し悪くなってしまった。p. 42～43に書かれていることは非常によいと思う一方で、そこに行くまでに、そもそも外国人が日本に入ってくるかどうか、また同じようなことが起きた時に日本に住んでいたら危ないという考えが残ってしまうかもしれないので、どうすればよいのか私にはわからないのだが、何とかこの状況を乗り越えないといけないと思う。

○突々委員

まずp. 64ページの「豊かな海の再生」に関しては、前回発言したことをきちんと書き込んでいただいてありがたく思う。一方で、日本海と瀬戸内海で合わせて550億円の水揚げ高がある漁業について、地産地消の中でかなり兵庫県民に食べていただいていると思うが、産業としての漁業に関する記述が全体に少し足りないように感じる。これが1点目。

2点目は、今、盛んに言われているカーボンニュートラルに関して。ブルーカーボンとして海藻などに炭素を固定する海の機能がこれから大きく見直されていくはずである。30年というスパンのビジョンなので、この部分の海の役割も書き込んでほしい。

○那須委員

働く者の労働環境がこれからどう変わっていくかは非常に大きなテーマだ。様々なテクノロジー、特にデジタル技術によって人口減少への様々な対応を図っていくことは理解するが、全ての出発点である働くことがどうなるのか。テレワークの推進、さらにはパーソナルプラントの創出といった次世代技術を導入していくときに、そこに労働がどのように関わっていくのかは、長期ビジョンの中でも大きなテーマとなるはずだ。

コロナ禍の中でエッセンシャルワーカーと呼ばれる皆さんが社会を支えていることが明らかになった。このことが前提にあった上でデジタル化の進展が可能であるということを書き込んで記述すべきではないか。とは言え、デジタル化によって業務の効率化を進めていく必要があることは理解するし、避けて通れない部分でもあると感じており、労働組合としても、次の運動方針を考えていく上でビジョンを参考にしていきたいと思う。

○伴委員

柱立て3「つながりの再生」に関して、自治会が次の担い手を見つけるのに苦労してい

て、婦人会も子供会も同じ状況にある。その意味で、地域を守っているつながりを新しく作り直さなければならない。そのときに生活者、生産者、それぞれのいろいろな分野の人たちがうまくつながれる仕組みを作っていくことが大事だ。私たちの生活の根幹を支えているつながりを広げ、「助けて」と言える社会づくりを進めていく必要がある。

一例として、コープこうべでは「たすけタッチ」という取組を始めている。例えばごみ出しが難しい人がごみ置き場まで誰か持って行ってよ、とスマートフォンで投稿すると、それを見た人が、私行きますと手を挙げ、その人がごみ出しをする。そのようなちょっとした助け合いの仕組みが作れないか、ということで始めた。それが新しいつながりを作ることになればと思っている。このような例も参考にさせていただけたらと思う。

○平田委員

今回の試案には芸術の要素がたくさん入っており、ありがたい。豊岡の城崎国際アートセンターには毎年100件近い申し込みが世界中のアーティストからある。想定外だったのは、東アジアのアーティストが非常に増えているということだ。マレーシアやタイ、シンガポールのアーティストが、自分で自国の助成金を得て日本に来られるような経済状態になったということである。そのときに日本の城崎国際アートセンターのレジデンスアーティストに選定されたというお墨つきが彼らにとっては非常に大きな意味を持つ。要するに、ブランドイメージを高めれば、お金は向こうが持ってきてくれる時代になっている。しかも兵庫県はそれができるすばらしい環境にある。従って、杉本委員からも指摘があったが、世界が憧れる兵庫県、私の分野で言うと、アジアの若いアーティストが集まってくるような、そういう兵庫県を目指すとよいと思う。

もう一つ摺河委員から指摘があったコミュニケーション教育について。豊岡市は今、演劇的手法を使ったコミュニケーション教育を市内38の全小中学校で導入している。県内では宝塚市もこの7～8年、半分ほどの小学校で導入し、他の市町でも導入を検討しているので、県でも施策の中核にこうしたものを是非入れてほしい。豊岡市は来年度から障害者向けや、高齢者向けのワークショップも始める。認知症予防、成人病予防、それから障害を持った方たちが社会に関わりをもつときのコミュニケーション能力を持ってもらうということだ。ただ単に助けるということではなくて、社会参加の一環としてこういう手法を使っていく方向になっているので、こうしたことも是非県の方で検討してほしい。

○三上委員

これからこのシナリオをどのように地域の実状に落とし込んでいくかの応用が問われる段階になる。ビジョンのアクションプランを作り、事業の優先、強弱をつける形で施策化していく際に留意すべきは、p.30の「AIを活用した未来予測」で示されている分岐点の考え方だ。分岐点で一旦枝分かれすると、別の方向へ行く道筋に戻るのが非常に難しくなるという考え方が示されている。2030年に大きな分岐が来るとすると、その時点までにどのような政策をすべきかが問題になる。AIによる未来予測は「風が吹けば桶屋が儲かる」の

面はあるが、人間の知恵では気づかない相関関係や因果関係を教えてくれるということでもある。AIによる未来予測を生かして、具体的な政策をどう肉づけし、体系化していくかが重要であり、シナリオを深めると同時に、アクションプランの中身を考えることが大事になる。また、地域版のAIによる未来予測にもチャレンジしていただきたい。

○諸富委員

p. 39の「ものづくり産業の革新」に関して。ものづくり産業を重視するのは、兵庫県の特性から言って当然だと思うが、一方でこれからの産業の姿を考えると、サービス業をはじめとする非製造業をどうやって伸ばしていくかを考えることも重要である。

パソナが淡路島に来る。これは非常に大きなインパクトだ。全国的にも注目されている。ここで重要なのはパソナが非接触型のサービス産業であることだ。オーナー経営者であり、兵庫県出身の南部代表の決断という特殊事例という見方もあろうが、南部氏は、他企業と共通する要因を挙げている。インタビューで南部氏は、まず福島第一原発事故を受けて会社の存続を考え、それから東京都に住む従業員の生活コストの高さを考え、その中でどこへと考えたときにリモートワークをやっているけれども新規事業を展開するには仲間意識の醸成が必要で、その意味で淡路島が最適だと考えたと言われている。淡路島のような環境こそが選ばれるということの意味をよく考え、県としてどういう環境が非接触型サービス業にとって望ましいのか、工場誘致という伝統的な政策の一方で、非接触型のサービス産業を伸ばす観点からどのような産業政策が必要かを考えることが重要だ。

○葭岡委員

「集中から分散へ」と「個性の追求」の考え方の一つの軸として、量的価値より質的価値を重視すべき時代が来ていると考える。地域ごとに多様な歴史や由縁などのストーリーが眠っている。それらを見直したり、再発見したりすることによって、人々の共感を呼ぶ流れをつくっていくべきだと考える。

もう1点、私が所属する明石青年会議所で兵庫県立大学国際商経学部のゼミ生の皆さんと連携して、明石の街の観光をテーマにいろいろとコラボレーションをしている。留学生と地域の連携の一事例だが、兵庫の未来を作る一つの手法になると感じている。

○吉富委員

一つ目は、p. 5の「多様性を活かす」について。昨年、兵庫県国際交流協会が多文化共生の150年史を作成する作業に関わった。開港以来、神戸は世界の様々な文化を育んできた。今でも世界の宗教施設が14もある。摂津のところで港町神戸を中心に今でも多くの外国人が住まうとだけ書いてあるが、もう少し外国の文化が地域に与えた影響や、世界の文化の多様性を生かしてきた歴史について触れていただきたい。

もう一つは、p. 42の「多文化が入り混じる兵庫」について。右下に兵庫県の多文化共生への取組の中で医療通訳の記述がある。先日、多文化共生推進指針の会議でも話したが、

医療通訳は市民団体が担うものではないと思っている。全国には県が主体になって医療通訳の仕組みづくりを進めているところも少なくない。兵庫県はNPOに助成してそれによしとするのではなく、医療通訳の制度づくりを目指すということを書いてほしい。今回コロナ禍の中で、言葉の問題で一番リスクが高い、情報が伝わりにくい人たちの問題が注目された。県が相談窓口だけではなく、医療通訳に力を入れることを期待する。

○吉本委員

人口減少・超高齢化、地球温暖化、人々の生活に大きな変化をもたらすAI・IoTの普及など、日本の社会が今まで経験をしたことのない大きな変化の時代を迎える。兵庫県は日本の縮図と言われるように、この試案の内容は日本のあるべき将来にも通じると感じた。翻って兵庫の特色は何か。第一に多様な個性があること、第二に排他的でなく、他の人、個性を受け入れるキャパシティを持つこと、第三に昔から文化や経済などで大陸との交流があり、近代には神戸港が西洋の窓口になり、進取の気風に富んだ社会であること、こういう特色を持つ県であることを考えると、この時代の変革を先導する役割を兵庫県は担えるのではないか。そのような思いをまとめの中に一言入れてはどうかと思う。

○井上委員

多くの県民にとっては、仕事を通じて多くの出会いがあり、仕事を通じて地域の活性化に取り組まざるを得ないケースも多くあると思うが、仕事に関係なく地域を越えていろいろな立場の人々が何かに対して思いを共有する機会が少ないのではないかと感じる。

県では、県民が意見を言う場を多数設けているが、より多くの県民の参加を推し進め、意見交換しながら合意形成する場を作り続けることが大事だ。安心できる人間関係や、文化を大切に作る社会づくりは、多くの人の交流を通じて持続できるものだと思う。市民参加による合意形成の制度や、地域とのつながりの重要性を実感する仕組み、そのようなものが多数あって、顔の見える関係や信頼関係が醸成されていくのだと思う。個人の自主的活動に待つだけでなく、県民の参加を緩く制度化していくビジョンも掲げるべきだ。

○佐久間委員

地域のつながりはどんどん希薄化している。コロナ禍で対面を控える話になって一層、地域コミュニティのつながりが危機的な状況になっている。これをいかにして元のように戻していくか、もしくは、ネットを使ってどうつながりを作っていくかが問題だ。この大きな社会変化に対応していく道筋を示すビジョンであってほしいと思う。

○松元委員

1つ目は人の意識の問題について。例えば「個性の追求」に関して、地方ほど新しいことをする時に理解が得られにくいという話がある。農業でも、新しい人に入ってきてほしい一方で、新規参入への抵抗もあり、思いが交錯している状況がある。技術革新は当然進

んでいくが、それになじめない人もいる。こうした、いろいろな部分で進む変化に対し、人の意識をアップデートする必要がある、そこをどう進めていくかを考える必要がある。

もう1つは、成長著しい隣国、中国との関係について。県も県内市町も姉妹都市提携や、経済面、人的側面で様々な交流をしてきており、この関係をもっと深めていく方向もあると思う。そうしたことを兵庫県が率先して行っていくような方向性を付け加えてはどうか。

○大川委員

p. 53の「ワーカーズコープ」が地域の様々な課題を解決する一つの糸口になればと思っている。自分たち組合員が出資して自ら事業をして、分配をするということで、いろいろな地域の課題に対応しながら、無職の人や非正規雇用の人の働く場も作り、地域の活性化も図れる枠組みだと思う。2020年12月に法制化されたこの制度の普及に期待している。

○山本和樹委員

先日、金澤副知事にも参加してもらって、北播磨未来フォーラムを開催した。地域ビジョンについて話し合ったが、コロナ禍の影響、人口減少・超高齢化が進む中での限界集落や人の孤立の問題など割とマイナスの話が多かった。ビジョンで大事なことは夢や希望を描くことであり、その行き先は魅力のあるワクワクするものでなければならないと考える。30年後はそれほど遠い未来でもない。あの阪神・淡路大震災から今年で26年。あと4年でちょうど30年になる。兵庫県は見事に復旧復興を遂げ、安全安心な兵庫を実現した。確かに、あの震災でなくしたものは多かったが、正の遺産として例えば災害ボランティアが定着し、社会人だけでなく多くの学生が他県の被災地で活躍している。そのようなこともあるので、明るいビジョンを描くことが大事だと思う。

○藤本委員

地域では、全県ビジョンに並行して、地域ビジョンを作り変える作業が進められている。県のビジョンは、各市町のビジョンと関連し、さらにその先の市町の中の校区単位、集落単位の取組と関わってくるので、そうした小さな組織の中に展開できるようなビジョンのあり方を考えてほしい。私も小さな集落で生活しているが、その中でもこの試案が一つのバイブルになって、それを活用して地域づくりの方向を考えることができるようなビジョンになったらよいと思う。その意味で、この試案は少し難しく、カタカナ語も多く、分かりにくい面があるので、そうしたことも意識してまとめてほしい。

○門田委員

試案の大潮流の中で企業の寿命は23.7年、中でも情報通信産業は16.7年との記載がある。企業の寿命が短くなる一方で、個人の寿命は長くなるわけで、生活の厳しさが少し増していくのかなと感じた。

未来シナリオではデジタル化に伴う情報の共有化がどのような場所でも瞬時に行える社

会が構築されるといった輝く未来の方向性が示されているが、県民が価値観は違っても協調、相互理解していけるかが一つのポイントであり、そのお世話をする人材の発掘、育成や、県民のそうした心を育む環境づくりが必要と考える。

p. 52「スポーツが育むつながり」やp. 54「自分たちでつくる地域」などは自分も参加できる未来シナリオだと感じた。各地域の地域ビジョン委員がお世話をする立場でこうしたビジョンの実現に向けて取り組んでいければと考えている。

○木築委員

人口減といえば多自然地域、多自然地域といえば疲弊というネガティブな捉え方が多い中で、p. 23の大潮流1で、そうした発想は捨てるべきと書かれているのがうれしい。但馬には、本当に元気で楽しんでいる高齢者が多い。実は畑を持っている人が多く、そのことも原因かなと考えたりもする。手をかけた分だけ応えてくれる野菜があって、それが生きがいや安心、自己肯定感につながっているのではないかな。またその旬菜を工夫して食べるということが健康にもつながっていると実感する。

もう一つは、p. 51の未来シナリオ「広がる縁」に関して。テーマ型コミュニティの価値を示しているのが実はこの地域ビジョン委員の仕組みだと心から思っている。最近では「クラブハウス」や「あつまれどうぶつの森」が世界的に流行しているが、従来型の縁である同級生や地域、職場などが次第に本音をしゃべりにくい環境になってきた中で、地域ビジョン委員会のように、年齢も立場も異なるが思いや関心が同じ者同士の方が言いやすいと、参加率も高く、活発に活動しているという現状がある。多様な人が参加しているというのは、そこで楽しめているからだ。単なるサロンだと飽きてしまうが、何かのためになる活動をするということで魅力と持続性が増して、さらに地域の担い手づくりにもつながる。なお、末尾の記載は「交流を楽しんでいる」よりも「交流や活動を楽しんでいる」と変えていただく方がよいと思う。

○岸委員

構想に示された課題の解決は非常に難しいものが多い。例えば人口減少・超高齢化は避けられないが、目標に掲げられている「人口が減っても活力を保ち、一人ひとりが幸せを実感できる兵庫を創る」の実現は並大抵のことではない。今後30年、人口減少・超高齢化が進んでも、経済の縮小や社会の活力低下を引き起こさないようにするためには、一人一人が自分の能力をもう一段高められるような人材育成制度を作る必要があると思う。

例えば、会社でセールスをやっている人がその経験を生かして地元自治体のPR活動に取り組んだり、看護師をされている人が地元自治体のケースワーカーとして活躍できたり、一人二役、あるいはそれ以上できるように新しい能力を身につけたり、リタイア後も再度活躍できるような新たな能力を身につけたりといった、能力の再開発支援制度を作る必要がある。学び直しができる学校を作るイメージだ。

○山本益嗣委員

コロナ禍で我々の考え方や価値観が大きく変わった。考え方一つで働き方は随分変わる。周りを見てもそうだ。コロナ禍については、p. 55に「コロナショックから新たな価値観」という小さな記事があるが、まさに日本全体、あるいは世界全体の人々の考え方がこのコロナ禍で変わりつつあるわけで、そのような認識のもとに新ビジョンを作り、推進していく必要がある。

もう一つは「集中から分散へ」について。現実には人口は減るわけで、その人たちが具体的にどこに住み、どのようなコミュニティを作っていくのかのビジョンを示すべきだ。コンパクトシティ、適地集中といった具体的な住み方のイメージを提示して、そこに引っ張っていく必要があると思う。

p. 61「進化する自治体」が面白い。地方自治体のあり方が変わり、職員はコーディネータ化すると示されている。30年もあれば自治体自体も大きく変わると思うので、地域共同体の中での自治体のあり方の議論を深めて、もう少し具体的な30年後の自治体のイメージを示してほしい。

(3) 今後の新ビジョン検討の進め方

○五百旗頭会長

もう一つの議題の今後の新ビジョンの検討の進め方について意見を伺いたい。

○木南ビジョン課長

(資料2・資料3説明)

○五百旗頭会長

今日、皆さんから頂いた貴重な意見の数々を受け止めて意欲的な検討を進められることに期待し、若手有識者11名による委員会に新全県ビジョン案の検討を付託するということがよろしいか。

(「異議なし」の声あり)

(4) 閉会

○金澤副知事

非常に密度の濃いご意見を頂いた。おそらくたたき台として示した将来構想試案が密度の濃いものになっているからだろう。将来構想研究会の皆さんに非常によい議論をしていただいたものが集約されているからだと思う。もともとビジョンは、できれば全ての県民が30年後こうありたいと願う兵庫の将来像を共有するために作ろうとしている。実現するとか形にする以前に、まず賛同する、共有する、そういうものでなければいけないと思っている。そういうビジョンを作っていくために、今回の試案の中ではあり得る未来につい

てできるだけ多くのことを書けるだけ書いてもらった。またできるだけ明解に、枝葉を落としてクリアに書くということも意識してもらった。あるいは、できるだけよい方向に目を向けて希望を見いだすような書き方をしてもらった。

ただ、県民の皆さんと共有するビジョンとなると、多岐にわたることを盛り込んだ分厚い冊子のままでは共有できないので、これからこの中から蒸留したり抽出したりして、エッセンスは何なのかを見出す、その作業が始まっていくことになる。材料がこれで出尽くしているかということも片方で検証しながら、エッセンスを抽出して煮詰めていく作業を新たに設ける委員会で進め、またこの審議会にお諮りすることになる。

これからも密度の濃い議論を期待している。引き続きどうかよろしく願います。

○五百旗頭会長

議論にも出たように、兵庫県は全国の縮図であり、力強さがありながら大らかな広がりがあり、多様性を受け入れる面があり、進取の気風がある。また、阪神・淡路大震災という大変な宿命を負いながら、それ以後の被災地を支える活動もやってきた。この兵庫県がこれからの大きな変化の難しい時期に先端的、先駆的な役割を果たしていくことを大いに期待している。皆さんの引き続きの御尽力、御奮闘をお願いする。

(以上)